台大日本語文研究第 12 期
2006 年 12 月，頁 1-30
本文 2006-1128 收稿，2007-0118 通過刊登

試論〈貧福論〉

趙姬玉*

摘要

《雨月物語》由九篇構成，篇篇都是充滿怪異性的短篇小說，是作者上田秋成採取怪異描寫手法刻畫人性頑冥偏執而成的作品。最終篇的〈貧福論〉亦不脫怪異本色。但相對於《雨月物語》其他各篇，作者揚棄以死者執著於陽世間愛慾情仇而陰魂不散留連人世以紓解心中塊壘，或是以復仇的手段來營造怪異世界的其他諸篇小說的創造模式，而採取以黃金精靈和節儉成癖的武士徹夜談古論今的方式，構築出迥然相異其他八篇的怪異世界。

本篇出場人物少，故事單純，以從富貴立場談論戰國武將的興衰成敗爲主軸，其作品特色與其說是出人意表的怪異性，毋寧說是秋成受到近世初期「談義本」（說教訓誡類書）的影響，創作核心不在於驚悚怪異，而是傾向於教訓性、批判性，導致本篇不若其他諸篇受到讀者愛讀，甚至有畫蛇添足之評。

然而透過本篇所營造出的怪異性、充滿知性的言論、以及文末一段近乎諂媚當權者的政治性預言，可以窺知秋成本人及當代人的金錢觀、宗教觀、社會觀之鱗爪。因此，筆者除了對本篇作品的人物、典故等中日典籍資料進行探討之外，更進一步嘗試解析本篇特有的批判色彩、寓意性的訓說。特別是秋成身爲知識人，縱情書海，不善營生，加以遭逢巨變，家財付之一炬。筆者擬透過秋成在字裡行間批判儒家佛教、富貴與努力不相稱等現象的言論，檢視憤世嫉俗的作者形諸於

* 台灣大學日本語文學系教授

文的金錢觀及思想觀。

關鍵詞：賤貧思想、善惡因果論、儒佛批判說、談義本

A Study of *Hin-fuko-ron*

CHAO, Chi-yu*

Abstract

Ueda Akinari's Ugetsu-monogatari, consists of nine short fictions, was written in a weird method, full of horror. The ninth story "Hin-fuku-ron" is no exception. However, this story is based on the long talk of gold fairy and mean samurai through all night, different with the other eight stories in which the dead stick to their own grudge, creating weird world of revenge.

Owing to few characters, simple plot and the samurai theme from the perspective of richness, this story is not as preferred as others.

However, from the weirdness, knowledgeable discourse and a near-hypothetic appreciation for the power holders, it is not difficult for us readers to catch a glimpse of Ueda and the age's money value and religious value. The study discusses the characters and origins of the story, the critical tone and Zhuangtze's tale style; and the goal of this thesis is also to criticize Buddhism and Confucianism, to survey Ueda's special money value, thinking value, and the true aim of his political predictions.

Key words: values of looking down upon the poor, theory of good and evil, discriminatory attitude against Confucianism-Buddhism, dangibon

---

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

「貧福論」試論

趙姫玉*

要　旨

『雨月物語』の九篇は、いずれも怪異性に満ちた短編小説である。作者の上田秋成が翻案の手法を駆使して怪異の世界を作り上げ、人間の性や偏執などを克明に描いたこの作品は、怪異小説の白眉として高く評価されてきた。最終篇の「貧福論」は、外の諸篇と違って、亡者が愛憎、慾情、怨念などのために、成仏できないまま人の世に迷い出たり、惨い復讐を遂げたりするというような常套的な筋立ての代わりに、黄金の精霊と、武勇の誉れは高いが吝嗇で無風流者とされた武士とが、命録観などについて徹夜論じ合う、という一風変った怪異小説に仕上げられた。

登場人物は、黄金の精霊の化けた翁と岡左内という武士の二人だけで、話の筋もきわめて単純である。富貴の立場から戦国時代の武将たちの栄枯勝敗を論議することが物語の中心となっているためか、外の諸篇ほどは愛読されなかったようである。

とはいえ、本篇の醸し出した怪異性、知識性に満ちた議論、ならびに最後の所に見られる権力者への諂いのような言説などを通せば、秋成自身や当時の人々の金銭観あるいは宗教観の一端を窺い知ることができよう。拙論では、「貧福論」の登場人物の設定や話の内容の拠りどころになっていると考えられる中日両国の典籍資料について新しく考察し、さらには秋成の創作意図、あるいは本篇独特な批判的な言説、近世初期の談義本に流れを汲むと思われる寓意ある説教

* 台湾大学日本語文学系教授

的な色彩についても分析を加えてみた。

キーワード：賤貧思想、善悪因果論、儒佛批判、談義本

「貧福論」試論

趙姫玉

一、始めに

『雨月物語』の最終篇「貧福論」は、従来、秋成の金銭観をもっとも生々しい形で打ち出したものだと言われている。従って、本篇には、火災に見舞われ、家財をすべてなくした秋成が、破産と言ってもいいその悲惨な経験によって思い知らされた周りの人間の冷たさに対する受け止め方あるいは感懐が反映している、とする見方がかなり有力のようである[1]。また、「人生の森羅万象についてなぜ、なぜと繰り返して問い詰めていたそういうおもかげがいつも秋成にはあったように、『雨月物語』の最終章「貧福論」のような、議論のための議論のような話でも、なぜなぜと、そのなぜをしつこく問い詰めていって、結論を彼なりに出していて、きわめて知的な線を持ち込んで、デイスカッション･ノベルを成功させているのです。」[2]という説もある。

一方、これとは違う観点からのものであるが、黄金の精霊と武士の対話という形で、「貧」「富」を議論するこの「貧福論」は、「仏法僧」を除く外の諸篇とはかなり違い、怪異の話としては魅力がない上に、考証や評論が先立って造形性に乏しいし、問答方式による文章の組み立てそのものも単調で平板に流れているので、『雨月物語』諸篇との間には違和感のある作品であり、あまり成功した作品ではないとする説もある[3]。さらに、「貧福論」にはいろいろな矛盾と自家撞着が露呈している、あるいは知識に訴える要素が多すぎるとい

---

[1] このような見方は先学の著作に多く見られ、その一例として重友毅氏の『雨月物語評釈』（明治書院、1980 年 8 月）をあげることができる。

[2] 松田修「対談 秋成の〈怪異〉」『国文学 解釈と鑑賞』（志文堂、1981 年 7 月）135 頁。

[3] 暉峻康隆・郡司正勝『江戸市民文学の開花 5』（至文堂、1976 年 4 月 ）127 頁。

うような批評も見られる。とにかく、本篇をマイナス面から評価する見方が多いことは事実である。そのためか、『雨月物語』の他の作品に比べて、この作品に関する研究が、『雨月物語』のどの作品よりも明らかに少ない。そして、今までの研究は、ほとんど「貧福論」の典拠あるいは作品に反映した金銭や貧富の問題に対する秋成の見方に主眼を置いてなされてきた。

本稿では、主に中国の典拠について検討を加えるが、いわゆる儒仏批判説、そして『雨月物語』全篇を結ぶ武将批判説なども合わせて考えてみたいと思う。

二、典拠・関係書について

「貧福論」の典拠といえば、まず、議論の内容のよりどころとなっている中国の『史記』の「貨殖列伝」と『五雑俎』があげられる。また、その趣向もプロットも、主に中国の書物からヒントを得たのであるが、主人公の造形や性格の描写は日本の書物を拠りどころとしている。以下、「貧福論」と関係があると思われるものを、（イ）日本の典拠・関係書、（ロ）中国の典拠・関係書、に分けて考察することにする。

（イ）日本の典拠・関係書

本話の主人公岡左内（すなわち岡野左内）については、いかにも近世の人々によく知られているかのように、いろいろな書物や記録からその逸話を見ることができる。その例として、

(1)『諸家高名記』（正徳四年、一七一四年刊）巻三の四「岡左内殿の働き団扇を取る事」

(2)湯浅常山の『常山紀談』（元文四年、一七三九年成立）巻十六「伊達上杉陸奥国松川合戦の事、附、永井善右衛門岡野左内が事」

(3)神沢貞幹の『翁草』（安永元年、一七七二年）第七「諸士」のうち、巻三十三の四「岡野左内のこと」

(4)伴蒿蹊　補『続近世畸人伝』（寛政十年、一七九八年刊）巻二の三、「岡野左内」

(5)向坂咬雪軒『老士語録』

(6)近藤武群の書いた『夜鶴集』（文政十一年、一八二七年刊）巻十三「岡野左内」

(7)五弓久文が撰した『事実文編拾遺』（弘化二年、一八四五年）巻の二「記岡野左内事」

(8)大槻平治が著した『近古史談』（元治元年、一八八四年）

などがあげられる。さらに、国枝清軒という人の手で写され、ほとんど同じ内容になっている『武辺噺聞書』（延宝八年、一六八〇年）第五巻「岡野左内福人之事併せ角栄螺甲之事」、『武功要名秘録』の中巻、『続武者物語』（延宝八年）の第五巻などの三書、あるいは著者も成立年代も不明の『武話叢談』第八巻と『襍物語』第五巻にも、岡左内に関する記事が載っている。いずれも岡左内あるいは岡野左内に関する記事が見える。これらの刊本あるいは写本は、十四点以上にのぼっているが、その中から『雨月物語』より遅く世に問うたものを除外し、中村幸彦、鵜月洋、浅野三平、井上泰至の諸氏の考察[4]をもとに篩にかけると、秋成は『常山紀談』あるいは『翁草』のどちらかを拠りどころにしたのではないかと考えられる。

しかし、浅野三平氏の指摘によると、『常山紀談』の場合、「元文四年刊」となっている序文あるいは図書館の目録があるが、実際に刊行されたのはかなり後年のことのようで、『雨月物語』ができるまでの秋成が目を通していた可能性はないという[5]。一方の『翁草』も、内容が『常山紀談』のそれと非常によく似ているものの、「岡左内」ではなく、「岡野左内」という名前になっているので、「貧福論」のよりどころである可能性が低いように思われる。

---

[4] 小論のこのあたりの叙述は、主に中村幸彦『上田秋成集』(日本古典文学大系 56、岩波書店、1968 年 10 月第 9 刷）131 頁の注釈 31 条、鵜月洋『雨月物語評釈』(角川書店、1969 年 3 月）639-641 頁、浅野三平「「貧福論」の考察」(『上田秋成の研究』、桜楓社、1985 年 2 月、366 頁)、井上泰至「「貧福論」の諷刺」(『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、1999 年 4 月、206-220 頁)を参考にした。

[5] 浅野三平「「貧福論」の考察」(『上田秋成の研究』、桜楓社、1985 年 2 月、366 頁）参照。

結局、浅野三平氏は、『諸家高名記』と『襍物語』だけが秋成の目に入り、示唆を与えた可能性があると指摘されているが[6]、内容の類似性から見れば、『常山紀談』の内容と「貧福論」のそれとの類似性は、『諸家高名記』よりもずっと高く、刊行が刊記よりかなり遅れたとする浅野三平氏の見方があるが、秋成が『常山紀談』の写本に目を通した可能性がまったくないとは言い難い。再考を要する。

次に、この作品に展開されている金銭論の内容、あるいは低俗化した儒教と仏教に対する批判の典拠・関係書については、次のようなものがあげられている。

(1)『宗祇諸国物語』（貞享二年、一六八五年刊）の巻五の「貧福有定」、『御伽百物語』（宝永三年、一七〇六年刊）

(2)都の錦『当世智恵鑑』（正徳二年、一七一二年刊）巻一の第一話「回国邯鄲のまくら」と第二話「善悪一時の報応」

(3)『論語』の学而篇、述而篇及び『孟子』、『中庸』第十七章

(4)『史記』巻百二十九の「貨殖列伝」第六十九の太公望呂尚のこと、張儀伝

(5)謝肇淛『五雑俎』巻五、人部一と巻十五、事部三

(6)佚斎樗山の『田舎荘子』（享保十三年、一七二七年刊）の一連の作品

(7)魯褒『銭神論』（安永八年正月、一七七九年刊）

この中で、『論語』、『史記』の「貨殖列伝」、『五雑俎』、『当世智恵鑑』[7]、『田舎荘子』などがその典拠になっていることは、ほぼ確実と考えられるので、先学の所説をそのまま認めてよいかと思われる。(1)と(7)の二書については、直接原文にあたっていないので、これ以上論じないことにする。

---

[6] 浅野三平『上田秋成の研究』（桜楓社、1985年2月）365-374頁参照。

[7] 冨士昭雄氏は『当世智恵鑑』巻一の話と「貧福論」とのつながり、とくに貧者の艱難な境遇および他人の土地を無理やりに自分のものにしたことに対する批判の言葉の類似性について、詳しい考察を加えている。同氏の「雨月物語の構想—浮世草子の影響—」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972年3月）を参照されたい。

なお、「貧福論」を考察するにあたり、秋成の「持つ寓言意識が享保以来の教訓談義本とほとんど同じ位相から出発した物である」とする中野三敏氏の指摘は[8]、非常に示唆に富んでいる。、本篇において、秋成が浮世草子、談義本のたぐいを多く参考にし、作品に教訓的色彩を持たせているのは、そのためであろう。それでは、黄金の精霊が現れ、人間と貧福について議論を展開するという部分は何をよりどころとしているのだろうか。

諸先学の指摘を整理すると、物の精霊が人間の形をして現れるというくだりは、『今昔物語集』巻二十七第五の「冷泉ノ院ノ水ノ精、人ノ形トナリテ捕ヘサレタル話」と同巻第六の「東ノ三条ノ銅ノ精、人ノ形トナリテ掘出サレタル話」から、精霊が人間と対話するという設定は、『伽婢子』（浅井了意、寛文六年刊）の「和銅銭―長柄僧都が銭の精靈に逢ふ事」と『御伽物語』（延宝六年、一六七八年刊）巻六の「黄金の精并百ものかたり果て宝を得し事」の話から、金を大切にしたから精霊が現れたという精霊が現れる原因を説明する部分は、『古今著聞集』巻十一の「蹴鞠」の条に見える侍従大納言成道が鞠の精に会う話、あるいは『当世智恵鑑』（正徳二年、一七一二年刊）の巻一第三話の「武家行跡の評判」から、それぞれヒントを得ていると言われる[9]。

ここで注意を促したいのは、これらの先行物と「貧福論」の類似性は、いずれもごく部分的なもので、(1)精霊が左内の夢うつつのうちに姿を現し、(2)金の流れ方について議論し、(3)その後に消える、というまとまった形で秋成にヒントを与えたわけではない。これらを直接に典拠と見なすのには躊躇を覚えると言わざるを得ない。それで視点を変え、むしろいろいろな中国の典拠からヒントをえたのではないかという角度から、典拠と考えられる中国の典籍を再検討し、私なりの典拠論を進めたいと思う。

---

[8] 中野三敏「寓言論の展開―特に秋成の論とその背景」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972 年 3 月）参照。引用は 290 頁による。
[9] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）645 頁参照。

（ロ）中国の典拠・関係書

中国の関係書のうち、晋の魯道元（魯褒）の『銭神論』に、すでに金銭の精霊が人間の形をして現れる趣向が見られるという[10]。日本でも、秋成以前に、『銭神論』を真似て書いた作品があり、『伽婢子』に出てくる銭の精靈もその一つに数えられる。これについては、前述した浅野三平氏の詳しい研究業績があるので、これ以上立ち入らないことにする。それ以外に、秋成にヒントを与えたものはないかと考え、「三言」「二拍」「二話」などの中国典籍を調べ直してみた。

結論から先に言うと、黄金の精霊が岡左内の枕元に現れ、お金をめぐって対話するというモチーフは、『初刻拍案驚奇』の巻一「転運漢遇巧洞庭紅　波斯胡指破龗龍殼」（以下、「転運漢」と略称する）から着想を得たかもしれないというのが筆者の結論である。なぜならば、「転運漢」の内容は、精霊が夜に現れ、主人公と対話するという「貧福論」の設定、貧福と運命との関連をめぐる対話内容、「天時、地利を得て、おのずからなる富貴」「天時、地利を得なかったばかりで、まじめに働いても貧窮になる」と例を挙げながら説明するところなどとかなり類似しているからである。

二つの話からなる「転運漢」は、『初刻拍案驚奇』の第一話となっており、「倒運漢遇巧洞庭紅」という題名で、『今古奇観』にも収められている。この話は、奚疑主人（こと澤田一斎）が訓訳した『小説粋言』（宝暦八年）の巻の二にも見られる。以下、共通点のあるところに重点をおきながら、話の梗概を説明する[11]。

宋の時代、汴京に金維原という人がいた。商売人で、毎日朝早く起き、夜は遅く寝るようにして、目がさめさえすれば、お金のことばかり考え、しかも金儲けの事しかやらないので、ついに身代を拵えた。そして、その儲けたお金を八個の銀の大判に造って……枕もとに置き、一晩じゆう撫で撫でして撫で回してから眠りにつく。……

---

[10] 前掲書 464 頁参照。

[11] 訳文は主に平凡社東洋文庫 45『今古奇観（2）』（千田九一、駒田信二訳、1965 年 6 月）の第九話を参考にした。

金維原には四人の子があったが、七十の誕生日に息子たちは酒席を設けてお祝いをした。金維原が嬉しいあまりに、息子たちに「……この際、吉日を選んでお前たちに一対ずつ分けてあげるから、家を鎮める宝にしておくれ」と言った。四人は喜んでお礼をいい、心ゆくまで楽しく語り合って分かれた。

その晩、酒気を帯びた金維原が燈をつけて床に入り、八個の大判をしばらく撫でさすってから、ハハハと笑い、そのまま眠りについた。まだうつらうつらしているうちに、寝台に誰かが近付いてくる足音を耳にした。……燈火のほのかな明るみに、帳をまくって見ると、白い着物に赤い帯の大男が八人、身を屈めて進み出た。大男たちは、「我ら兄弟は……あなたさまの並々ならぬご愛顧のもとに、……長い間珍重を蒙りました。」と言い終るやいなや出て行った。金維原は何が何やら、ただただびっくり……燈を明るくかきたて、枕元を照らしてみると、すでに大判の姿はなかった。夢の中で聞いたことをよくよく考えてみるに、一言一句みな事実なので（まさにその通り）……。

節約しても結局お金は自分の物にはならないという、金維原の話の後に語り出されたのは、同話に収められている、努力しても運の悪い文若虚という男が金儲けにあきらめたところへ、思い掛けない金運に恵まれ、お金持ちになった話である。

この話に見える、「あまり家業には精を出さず、坐して喫えば山も空しのたとえどおり、祖先の遺した千金の財産も見る見るうちにすりへらしてしまった」という描写も、「足るを知るということが大切だよ。どうやら人生には運否天賦というものがあって、無理に求める事はないようだ。」「富むべくして富みえず、貴かるべくして貴くなりえず」「生来福運のある者ならば、学問ができなくても試験に受かって出世もするし、武芸がまずくても大いに重用されもするもので、まことに時、まことに運、まことに命というべきである。」「運がなければ、掘った黄金も銅となり、運がむいたら、拾った白紙も布となる。要するに、運命の神の御意のままというわけである」、「万

事に分すでに定まれり」などのことばも、「貧福論」の議論の内容、特に左内の抱いていた疑問と一脈相通ずるものがある。また内容のみならず、人物の性格や用語などを整理すると、次のような類似点が見られる。

（甲）主人公の類似

岡左内も、金維原という翁も、けちで、（茶味翫香を娯しまず）金儲けの事ばかり考えている。しかも、二人とも金貨、銀貨を弄ぶことを楽しみとしている。

（乙）語句の類似

1.其夜左内が枕上に人の来たる音しけるに、
只聽得床前有人行走脚歩聲

2.目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて座れり。
床前燈火微明、八個大漢曲躬而前

3.君がかしづき給ふ……。年来篤くもてなし給ふうれしさに
蒙我翁過愛、珍重多年

4.つら／＼夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、……粗其意を得て、ふかくこゝに信を發す。
細思夢中所言、句句是實

5.其夜——是夜

6.「貧福論」の「黄金の精霊」と「轉運漢」の「白銀の大漢」、「ちひさげなる翁」と「大漢(おおおとこ)」はそれぞれ対照をなしている。秋成がわざと変えたのだろうか。なお、両方とも「翁」「燈臺の下に」と「床前燈火」の共通な言葉が出ている。

以上述べたように、「転運漢」の話は、「貧福論」独自のものと見られてきた、道徳律から金銭が独立しているという対話の内容、それから、富貴と運（命禄）とのかかわり（つまり、仕事に精を出したかどうかということと金儲けできるかどうかということとは、必ずしも正比例するわけではないということわり）の説明と、かなり高い類似性を持っているし、黄金の精霊が左内の夢うつつのうちに現れるくだりの設定あるいは趣向とも、共通性を有することは明ら

かである。のみならず、両作品とも「運否天賦」という運命論が土台になっている。したがって、これを典拠の一つに数えることは決して根拠のないことではない。だからといって、いままでの諸説をすべて否定することではもちろんない。むしろ、「典拠を一つに限定して考えなければならない理由はない。……いくつかの構想を合わせた構想の重層化とアイロニーが狙われていた」とする鵜月氏の見方に従いたい[12]。

三、再び中国典拠について

「貧福論」の中の議論の内容、すなわち金銭論の要諦は、全て『産語』をもとにしたもので、字句・人名など具体的な点でも一致している、とする井上泰至氏の見解は注目に値するが[13]、納得のいかない点もないではない。以下、井上説を踏まえながら、その典拠について再び検討を加えることにする。

まず話を中国典拠に限る。黄金の精霊の貧富思想批判論に対し、左内が疑問をもって反問することば、それから、未来記の形式で貧福について讖語を授ける趣向、「夜既に曙ぬ」と「天色已曙」を比べてみても分かるように、翻訳と言ってもよいほどの語句の類似、富貴貧賤に対する批判や諸将を評論するという形式などにおける類似性から見て、『剪燈新話』の巻三「富貴發跡司志」および「竜堂霊会録」の翻案作である『伽婢子』の「幽霊評諸将」との間に、深いかかわりがあることは容易に考えられる。これについては、いままですでに詳しい考察がなされてきたので[14]、詳述しないことにする。ここでは、新しい典拠になると思われるものを一つ付け加えたい。

私見によれば、諸将を論じるという話の形式は、『剪燈余話』巻二の「秋夕訪琵琶亭記」にも見ることができる。すなわち、「左内いよ

---

[12] 鵜月洋『雨月物語評釈』(角川書店、1969 年 3 月) 646 頁。
[13] 井上泰至「「貧福論」の諷刺」(『雨月物語論—源泉と主題』、笠間書院、1999 年 4 月、216 頁)。
[14] 後藤丹治「雨月物語の成立と剪燈新話」(『国語国文』、1963 年 7 月)。

/ \ 興に乗じて……」以下の諸將を評するところは、「秋夕訪琵琶亭記」とかかわりがあるように思われる。「秋夕訪琵琶亭記」には、次のくだりが見られる。

> 歌竟勸韶晝飲、數杯後、韶豪態逸發、議論風生、與麗人談元末群雄起滅事、如目覩且詢陳主行事之詳、麗人曰：春秋為尊者諱、為親者諱、此非妾所敢知也。……

右の文章を日本語に訳すと、「歌い終わって、韶に酒をすすめ、酒がまわると韶もすっかりいい気になって卓論風発、麗人と元末の群雄興亡のあとを談じて、まるでありありと当時のことを眼前に見るようであった。そして陳友諒のことを詳しくたずねると、麗人は「目上の者、親しいものの悪事を語ることははばかる、と『春秋』にもございます。ですから、これは私の知るべきことではありません。」というように、昔のことを論じ合ったりした[15]。」のようになる。これを見ると、次の諸点において「貧福論」と共通している。

(1)「左門いよいよ興に乗じて、「霊の議論きはめて妙なり。……と「韶豪態逸發，議論風生」は、表現が完全に一致しているとは言えないものの、意味が相通じているし、「議論」ということばも両方に出ている。

(2)「これ又人道なれば我しるべき所にあらず。」は、「此非妾敢知也」（これは私の知るべきことではありません）と言葉のニュアンスがぴったり合っている。

(3)「貧福論」の諸將を評するところは、「秋夕訪琵琶亭記」に見られる、陳友諒等元末の群雄が割拠し、いつ果てるとも知らぬ騒乱の中にある諸將の性格などを評するところに相当する。つまり、両方とも主人公の口を借りて、盛衰成敗、興亡治乱の理を語り、感懐を述べている。

要するに、謙信、信玄らを論じたり、諸將を評したり、終わりに漢詩を読ませたりするという「貧福論」の趣向は、『伽婢子』の巻五

---

[15] 訳文は平凡社、中国古典文学大系 39 『剪燈新話 余話 西湖佳話 棠陰比事』（平凡社、1969 年 11 月）164 頁による。

の二「幽霊評諸将」からヒントを得たものだとする従来の説に異論を挟むつもりはないが、「秋夕訪琵琶亭記」も「貧福論」の一典拠と見なしていいのではなかろうか。

ちなみに、『伽婢子』の「幽霊評諸将」に見られる武田信玄、上杉謙信、北条氏康、織田信長に対する批評は、すべて『甲陽軍鑑評判』（承応二年、一六五三年刊）から取り入れたものだといわれる[16]。そうだとすれば、「貧福論」の最終段の叙述も間接的に『甲陽軍鑑評判』から影響を受けたと考えられるかもしれない。

ところで、「卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母のごとくしたしみ、食ふべきをも喫はず、穿べきをも着ず、得がたきいのちさへ惜とおもはで、起きておもひ臥てわすれねば」という部分は、通説によると、『史記』「貨殖列伝」の「能薄飲食、忍嗜飲、節衣服」というところからヒントを得たとされている。頷ける説であるが、『五雑俎』巻七の「人有好貨財者臥起居言動食息無所往而不与阿堵具也、一日病且死、強起閲庫藏、白鏹如山、拊摩不忍舎去」（財貨の好きな人がいた。常住坐臥、言動から食事休息まで、どこに行くにもお金といっしょに行動しないことはなかった。ある日、病気になって今にも死のうとしていたとき、むりやり起きあがって蔵の中を調べた。黄金が山のようにあったので、撫でたりさすったり立ち去るに忍びない、という意味）、および『二刻拍案驚奇』巻三十三の「楊抽馬甘請杖、富家郎浪受驚」（以下「楊抽馬」と略称する）に見られる「大凡富人沒有一個不慳吝的、惟其看得錢財如同性命一般、寶惜備至、所以錢神有霊、甘心跟著他走、若是把來不看在心上、東手接來西手去的、觸了財神憤怒、豈肯到他手裏來？故此非慳不成富家、纔是富家一定慳了」（およそ金持は、けちでないのがいない。お金をわが命のように大事にするので、福の神もついて行くわけだ。お金を粗末にし、手に入ればすぐ使ってしまう人なら、福の神も怒ってついて行

[16] 市古夏生「『伽婢子』における状況設定」（『近世初期文学と出版文化』、若草書房、1998 年 6 月）に紹介された江本裕氏の所説。

かないはずだ。だから、けちでなければ、金持にはなれない。金持なら必ずけちだ。）という部分も、因果と貧富の矛盾についての秋成の批評に何かの示唆を与えたように思われる。

結論としては、貧福の論理を巧みに生かし、不徳だけれども慳吝である人には金が集まり、至誠のある人からは金が離れる、という因果論の矛盾を解釈しようとする部分は、『五雑俎』そして「貨殖列伝」と並んで、前に取り上げた『初刻拍案驚奇』の「轉運漢」と『二刻拍案驚奇』の「楊抽馬」も「貧福論」の有力な典拠として認めるべきだと思われる。

それから、「管仲九たび諸侯をあはせて、身は倍臣ながら富貴は列国の君に勝れり。」の「九たび諸侯をあはせて」という部分であるが、これは秋成が史記の「九合諸侯」を誤読したもので、九合は実は糾合の意味であるとするのがいままでの通説で、中村幸彦氏をはじめ、諸氏の評釈あるいは解説に見られる。たとえば、中村幸彦氏は「九合は糾合で、連合の意だが、秋成はこれを九度の連合ととったので、九たびとあるのである」と論じられているし[17]、鵜月洋氏も「ここは秋成の誤読である。「九たび諸侯をあはせて」といえば、諸侯を九回会合させるの意になる。秋成には、時折、こうした誤読がある。秋成の漢学に対する教養の問題である。」と批判するかのように、秋成の漢文力に疑問を示されている[18]。秋成が中国の書物、特に白話小説を読み違え、そのまま引用した個所が『雨月物語』諸篇に見られるのは事実であるが、「九たび諸侯をあはせて」を誤読によるものと断定することができない。

「九合諸侯」は、もともと「九回諸侯を糾合する」ことを指している。『論語』の「憲問篇」に、「桓公九合諸侯、不以兵事」とあり、その註疏に次の文章が見られる。

---

[17] 『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（新編日本古典文学全集 78、小学館、1995 年 11 月）456 頁。
[18] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）650 頁から引用した。

> 史記云、兵車之会二、乗車之会六、穀梁伝曰、衣裳之会十有一、范寧注云、十三年会北杏、十四年会鄄、十五年又会鄄、十六年会幽、二十七年又会幽、僖元之年会檉、二年会貫、三年会陽穀、五年会首止、七年会寧母、九年会葵丘、凡十一年会、不取北杏及陽穀、為九也。

つまり、会合は全部で十一回あったが、北杏と陽穀での会合を除外すれば、九回となるわけである。『左氏』表十一にも「八年之中、九合諸侯」とある。一方、『論語集注』には、「九、春秋伝作糾」とある。とすれば、「九合諸侯」は「九たび諸侯を合せる」とも「諸侯を糾合する」とも解釈できることになる。秋成は、前者の解釈をとったにすぎない。

なお、「西にひがしに走りまどふ蹺蹊さらに閑なく、その人愚かにもあらで才をもちうるに的るはまれなり。」というくだりは、『徒然草』第七十四段の「蟻の如くに集まりて、急ぎ南北に走る、夕に寝て朝に起く、営む所は何事ぞや」に拠っていると言われる[19]。この説の当否はさておき、「蹺蹊」という単語について考えてみたい。原文には「ありさま」と振仮名がふってあるが、中国語の原義は「様子があやしい」、「様子がうさんくさい」「ことがおかしい」なので、秋成のペダンチズムでなければ、彼が参考にした白話小説の日本語訓読本あるいは注釈本の間違いによるものと考えられる。あるいは、「蹺蹊」はもともと様子を形容することばだから、日本語の場合、意味の転移が起こった結果として、「ありさま」を表すようになったのだろうか。

中日両国におけるこのような単語の使い方のずれは、ほかにも例がある。たとえば、「歌」と「哥」の場合がそれである。中国では、「歌」と「哥」は完全に意味の違う同音異義語であるが、近世の日本では、「哥」は「歌」の同義語として使われていた。しかし中国語

[19] 後藤丹治「雨月物語の成立と剪燈新話」(『国語国文』、1963 年 7 月)。

の場合、「哥」には「歌」の意味がなく、兄貴、兄さんの意味でしか使うことができないのである。「弟子」を「末のむすこ」の意味で使うのも中国語にない使い方である。同じような問題は少なくないようである。翻案文学と中国の典拠を比較する場合、特に注意しなければならない問題である。

四、作品に見る作者の創作意図と思惟

高田衛氏の指摘によると、「『雨月物語』においても最終篇「貧福論」が『西山物語』との対抗意識のもとに執筆された可能性があり、それは『雨月』の成立年次の問題ともからみあって、綾足の存在は『雨月』理解の上でも逸することができない」という[20]。同氏はさらに、『雨月物語』における「貧福論」の位置付けを考察するにあたり、

> 「貧福論」は『雨月物語』九編の末尾であり、その批評的性格において特殊である。なぜならば、その批評は具体的対象によって成立したからである。「明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜」に筆をとどめたのは、おそらく編次のとおりに、この「貧福論」であったであろう。岡左内は、同年二月に刊行された、『西山物語』の主人公、大森七郎という人物にたいする批判を契機に比較的に形象した者に他ならないからである。同時に『西山物語』の「宝」(金銭)観に、秋成は現代に無媒介にのめり込む死語たちを見、それは文字通りのことばの残骸の醜悪であったから、激怒した。

と述べられ、『雨月物語』の中の唯一の不可知的な世界から人間の夢うつつな世界に来た黄金の精霊の語りかけは、秋成に『西山物語』の貧福の論理を破砕するという目的があったからであるという結論

---

[20] 高田衛『雨月物語詳解』(有精堂、1980年9月)318頁による。なお、『上田秋成年譜考説』、小学館日本古典文学全集第48巻の解題にも同じことが述べられている。

を下されている[21]。

周知のように、建部綾足の『西山物語』は、擬古文に語彙の割注を施すという文体で書かれている。すでにふれたように、秋成は建部綾足——特にその『西山物語』の内容が事件の真実を伝えていないことに不満を持っているので、それに対抗する意図で、「樊噲」や『ますらを物語』を著したと言われる。このことは、すでに多くの先学の研究によって指摘されている。上述した高田氏の指摘も、これを意識した上での発言に違いない。ここで、大森七郎と岡左内を結びつけて考える氏の見方をあらためて吟味してみる。

岡左内という名前は、秋成の浮世草子『世間妾形気』巻三の第一「武士の矢たけこころもつまる所は金」の一章にも「いにしへの岡左内にもひとしき癖れども……」と見えるので、秋成が『雨月物語』を執筆する前には、すでに同一人物に関心あるいは興味を持っていることが分かる。しかし、「貧福論」の主題は議論の内容にあり、創作動機も岡左内という人物像を描きたかったことにあるのではない。「貧福論」と『西山物語』を結びつけて考える場合、まず、両作品の主人公である大森七郎と岡左内がどちらも武士であることに目を向けるべきである。一方は名誉ばかり気にしている武士として、もう一方は世間の武士に似ず、金にこだわらないはずなのに、金を蓄えることに非常に執着している武士として描かれている。二人の主人公の性質がまったく対蹠的になっていることが分かる。しかも、「貧福論」の中には、武士云々のことばが頻繁に出ている。そこで、武士道の線に沿って、対話の内容を手がかりに、本篇における秋成の創作動機、モチーフ、宗教的思惟などを追究してみることにする。

まず、秋成はなぜ黄金にもっとも縁の深いはずの町人の代わりに、わざわざ武士の仲間につまはじきされても、お金の倹約にこだわりつづける、岡左内という人物を探し出してきてまで、黄金の精霊の相手役に据えたのかという問題について考えてみよう。重友毅氏は

[21] 高田衛「幻語の構造　雨と月への私注」(『上田秋成　怪異雄勁の文学』、思潮社、1972 年 10 月、44 頁)。

これを「貧福論」の一篇にとどまらず、『雨月物語』全体を通じての問題とされ、「庶民といううちにも、町人はひどく軽んじられて、郷士・農民といったものの方に重い役割が与えられている。これはかれが、その町人生活を扱った気質物に筆を絶って、この『雨月物語』という読本の世界へ乗り出してきたこととも関連づけて考えられるべきこと」である、と近世時代の階層意識に結びつけて説明されている[22]。卓見であるが、これで、問題が完全に解決されたとは考えられない。

一方、井上泰至氏はこれと違う観点から、「本話を一読すれば、明らかに儒教の清貧主義や仏教の安易な因果説などの当代世相を意識した批判が見て取れる」と指摘され、さらに、「貧福論」の本文に見える次の一節、すなわち、

> 今の世に富るものは、十が八ツまではおほかた貪酷残忍の人多し。おのれは俸禄に飽きたりながら、兄弟一属をはじめ、祖より久しくつかふるものゝ貧しきをすくふ事をもせず、となりに栖つる人のいきほひをうしなひ、他の援けさへなく世にくだりしものゝ田畑をも、價を賤くしてあながちに己がものとし、今おのれは村長とうやまはれても、むかしかりたる人のものをかへさず……。

という文章を証拠に、秋成は当代の拝金主義を意識しながら、それも特に武士への当てつけのために「貧福論」を書いたのだ、という見解を示されている[23]。

確かに右に掲げた左内の言説のなかに「俸禄」という言葉が用いられている。周知のように、「俸禄」というのは、普通は「知行」「俸給」の意味に解され、当然、官吏——近世の場合は、幕府と皇室関係の仕事をする人たち——と武士の給料を指すことになる。したがって、このあたりの描写を武士に対する批判と受け取ること自体に

---

[22] 重友毅『雨月物語評釈』（明治書院、1970 年 8 月）419 頁参照。
[23] 井上泰至「「貧福論」の諷刺」（『雨月物語論—源泉と主題』、笠間書院、1999 年 4 月、206—221 頁）。

は間違いがない。また、『産語』が「貧福論」に見られる金銭論の下敷きになっている、という氏の指摘も妥当なように思われる。しかも、「貧福論」の終わりに、戦国時代の武将たちを評する一段もある。これらを総合して考えると、井上氏の見方は一応成立すると言えよう。しかしよく検討してみると、次のような疑問が生じる。

「今の世に富るものは、十が八ツまではおほかた貪酷残忍の人」という左内のことばは、批判の対象を八割の金持ちに限定しているので、直ちに武士の拝金主義への批判と決め付けていいかどうか疑問なしとしない。むしろ「今の世の金持ちは、十が八まではおおかた貪酷残忍の人である。その中の、(私と同じように)「俸禄」をもらっている武士でも」と自分の知っている武士を一例として、その中のごく一部の武士を非難する言説に過ぎないと考えられる。なぜかというと、そのすぐ後に、「今おのれは村長とうやまはれても……」という一村の長たるものを批判する言葉が続いているからである。当時において、「村長」を勤めるのは武士ではないということを見逃してはならない。

それから、次の一節はどうであろう。

> 恒の産なきは恒の心なし。百姓は勤て穀を出し、工匠等修てこれを助け、商賈務めて此を通はし、おのれ/\が産を治め家を富して、祖を祭り子孫を謀る外、人たるもの何をか為さん。……只「貧しうしてたのしむ」てふことばありて、字を學び韻を探る人の惑をとる端となりて、弓矢とるますら雄も富貴は国の基なるを忘れ、あやしき計策をのみ調練て、ものを戕り人を傷ひ、おのが徳をうしなひて子孫を絶は、財を軽んじて名をおもしする惑ひなり。

この文章は文人、武士への批判を意図したもののように思われがちである。しかし、これはあくまでも譬え話で、「恒の産なきは恒の心なし」の害を説明しているにすぎない。私見では、この一段も儒者、武士を特定しているのではなく、士(武士も含まれる)、農、工、商のすべてを対象とする発言と見るべきである。秋成は左内のこの

発言を借りて、文人の言葉が人に及ぼす無形の影響と武家の力が国家に及ぼす有形の影響を強調すると同時、各々の役目に精を出さない者を批判しているのである。決して武家社会だけ批判しているわけではない。

秋成の浮世草子の作品、つまり『世間妾形気』と『諸道聴耳世間猿』の人物設定は当時の大阪の人々、しかも秋成の友人、知り合いをモデルとしているという中村幸彦氏の説[24]、あるいは両作品の人物造型は『雨月物語』のそれと共通しているとする長島弘明氏の説[25]に異論を挟むつもりはないが、主人公の岡左内が武士だからといって、彼の所属する武士階級そのものを批判していると考えるのは、必ずしも妥当ではないように思われる。むしろ、「貧福論」は、秋成がいろんな書物から表現を借りて、彼自身のモチーフを分析し明確化しようとする意図のもとに書かれたものだ、とする鵜月洋氏の指摘[26]に従いたい。

なお、井上泰至氏の「武士への諷刺説」とも関連があるが、次に、「貧福論」には儒仏批判論が見られるとする通説についても、少し検討を加えたいと思う。

> かく果つるを仏家には前業をもて説しめし、儒門には天命と教ふ。もし未来あるときは現世の陰徳善功も来世のたのみありとして、人しばらくこゝにいきどほりを休めん。されば富貴のみちは佛家にのみその理をつくして、儒門の教へは荒唐なりとやせん……。

とある左内の疑問は、すなわち世の中の貧富貴賤の配分が公平でないことに対する秋成の疑問でもあろう。このくだりの後に続く黄金の精霊の言葉からみると、結局、秋成の金銭に対する疑問が解かれないまま、議論は徳川治世を褒め称えることに方向転換したが、わ

---

[24] 中村幸彦「秋成に描かれた人々」(『国語国文』32 巻 1 号、6 号、1963 年 1 月、6 月)。
[25] 長島弘明「作者・絵師・書肆・読者」(『日本文学講座 5 物語小説—Ⅱ』、大修館、1987 年 6 月、159-172 頁)。
[26] 鵜月洋『雨月物語評釈』(角川書店、1969 年 3 月) 664 頁。

れわれは左内のこぼした愚痴から、秋成の独特な金銭観および貧しいものを軽蔑する世間の風潮に対する不平不満や憤りの一端を窺い知ることができる。と同時に、そこには『雨月物語』の巻首を飾る「白峯」の議論を連想させる儒教、仏教に関する言説があることも見逃してはならない。

確かに、左内と黄金の精霊の対話の内容から、「尼嫣を蕩かすなま佛法ぞかし」、「おのがたからをたのみて他人にいきほひをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝじり、あさましき夷ごゝろをも見するは、前生の善心かくまでなりくだる事はいかなるむくひのなせるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌給ふとこそ聞つる物を、など貧福のことに係づらひ給ふべき。」などのような仏教を批判するような発言を検出することができる。しかし、これらの発言は、仏法が貧富貴賤配分の原理を説明しきれないことに対する批判にとどまっているように思われるが、仏教そのものを全面的に否定していると見ていいかどうか、はなはだ疑問である。「志誠ありながら、世に窮られてくるしむ人は、天蒼氏の賜すくなくうまれ出たるなれば、精神を労しても、いのちのうちに富貴を得る事なし」という言説も、秋成自身の疑惑を表してだけで、仏教を否定する言説と解釈することはできない。

なお、本篇には「貧しうてたのしむ」という顔子の言葉が人を惑わす是非を説く一条があり、さらに「儒門の教へは荒唐なりとやせん。」ときつい口調で儒教に言及した一句もあるので、井上氏も含めて、従来の諸説はおおむね「貧福論」の議論内容を「白峯」に見る秋成の儒仏批判論の延長と見なしている。しかし、その一方、「恒の産なきは恒の心なし」(『孟子』「梁恵王篇」、無恒産而有恒心者、惟士為能、若民則無恒産因無恒心)、あるいは「さても富て驕らぬは大聖の道なり」(『論語』「学而篇」、子貢問曰、貧而無諂、富而無驕、如何)とあるように、儒家の所説を取り入れ、儒家の主張の妥当性を説き、それに対する誤解を正そうとした言説もあり、老荘流の道家の淡泊さを批判しているように思われる所も見られる。たとえば、「貧しうてたのしむ」ということばは、孔子の愛弟子顔回の言った

ことば――「未若貧而樂、富而好禮者」――から採ったものであるが、この言葉は、世間に密着する儒教的な考え方よりも、むしろ遁世的な老荘の考え方に近いものである。

要するに、「貧福論」では、仏教だけでなく、儒教ないし道教的な清貧思想を批判する部分が見られることは確かであるが、仏教や儒教を全面的に否定しているわけではない。黄金の精霊の口を借りて、「善を撫悪を罪するは天なり、神なり、佛なり。三ツのものは道なり。」という儒教、神道、仏教を同一視するような言説、つまり、「儒、神、仏三教は人間の行い従うべき道である」という言説を言わせたゆえんである[27]。

以上述べてきたように、「貧福論」は、性質、主題、出来ばえなどが他の諸篇とあまりにも違っており、『雨月物語』の「圧巻の作」ではなく、「殿の作」であるので、秋成がこれを書いた動機については、多くの説が出されている。

「貧福論」は、師の都賀庭鐘の好評作『英草紙』『繁野話』に倣い、『雨月物語』を五巻九篇にするために、書かれた作品だと言われるが、その可能性もないでない。ただし、『雨月物語』は嶋屋が火災に見舞われたあとにできたものという前提が成り立つとすれば、この作品には、火災に見舞われ、家財をすべて失ったために、周りの人間の冷たさを思い知らされた秋成の心理の機微が現れているとも考えられる。

「貧福論」の最後の部分、つまり議論の終わりに、黄金の精霊は、信長、信玄、謙信、秀吉らを評価し、徳川の栄える太平の世を褒め称えるような意味の予言をもって全編を結んでいる。これを根拠に、政治的な考量という観点に結びつけて、秋成が「貧福論」を書く動機を考察する論がよく見られる。たとえば、高田衛氏は『雨月物語』が非公許（無許可）出版であることを論じるにあたり、秋成がご当家である徳川家のことに書き及んだことは、享保七年（一七二二年）

[27] 中村幸彦氏の解説による。日本古典文学大系『上田秋成集』（岩波書店、1968年10月第9刷）137頁、注釈27条参照。

十一月に出された幕府の出版取締り令に抵触し、筆禍を招きかねない行為であると指摘されている[28]。とすれば、秋成はなぜ危険を冒してまでそれを書かなければならないのか、という疑問が生じる。

これについては、平和な時代の到来を予言するのは、天下に太平をもたらした徳川幕府の統治者、特にその祖先である家康に尊敬の念を持っている町人秋成は、祝福の気持ちを表したかったからだとする説もあれば[29]、治世をたたえることばをもって、全篇の終わりを飾ったのは、当時一般の約束事にしたがったに過ぎず、仮名草子以来の慣習の現れだとする見方もある[30]。

「佛法僧」の冒頭文にも「うらやすの国久しく、民作業をたのしむ……」という徳川治下の太平の世が長く続くのを祝う表現が見られるが、近世のような封建社会を生きる町人、そして作家としての秋成にとって、徳川家に諂うようなくだりを「貧福論」、すなわち『雨月物語』全篇の終わりに書き加えたのは、はたして形式的なものであろうか。もし、そうでないとすれば、どう考えればよいのだろうか。「貧福論」という作品を論じるにあたり、これは寓言だとする説、秋成は国学的思想の持ち主でありながら、老荘的な思想を引いているとする説、儒仏を批判しているとする説、武士を批判している説など、色々な見解が示されたことは既述したとおりであるが、この段の言説の意味をもう一度検討する必要があるように思われる。

長じてやっと読み書きでき、「狂蕩」と言って自らを否定し、「浮浪子」と呼ばれる秋成が、三十歳近くまで独学し、和漢混淆文で『雨月物語』のような名作を著し、近世文学史上、いや、日本文学史上における大きな存在となった。このような秋成は、正真正銘の「翻案作家」と言われるにふさわしく、数多くの典籍から影響を受けたり、ヒントを得たり、素材を取り入れたりすることによって、しか

---

[28] 高田衛『雨月物語評解』（有精堂、1980 年 9 月）312 頁。
[29] 重友毅「秋成の幕政批判」（『秋成の研究』、文理書院、1971 年 5 月、514-519 頁）参照。「貧福論」についての言及は 516 頁に見られる。
[30] 近世文学史研究の会編『雨月物語参考資料』（文化書房）。引用文は 4 頁。

もその痕跡を留めながら、『雨月物語』という人口に膾炙した作品を作り上げた。そういうわけで、談義本からも影響を受けたため、未来記のような表現形式をもって、当世の権力者に諂うかのように、作品の終わりに徳川家を称える一節を加えたのではないか。

『雨月物語』九篇の第一篇の「白峯」、真中の第五篇の「仏法僧」、そして最終篇の「貧福論」のような議論的色彩の強い作品において、儒教と仏教に対して批判するような言説を示しながら、いずれも徹底せず中途半端に終わっている。徳川政権への配慮もあったかもしれないが、それらの議論は、つまるところ、すべて師の都賀庭鐘などの先行作品をまねたもので、外来文化の儒教、仏教から題材を借り入れ、議論形式をとったペダンチックな一般論に過ぎなかった。秋成の場合、白話小説の受容が始まったばかりの、衝撃の大きい時期に身を置いていたため、論理的な矛盾が目立ったのであろう。

五、終わりに

秋成は、『英草紙』と『繁野話』のまねで、『雨月物語』の篇数を九篇にするため、間に合わせ的に、「貧福論」のような「怪異性がない」「不徹底な態度がある」、「矛盾な論説」に満ちた「破綻作」を入れたのだ、という「貧福論」を低く評価する説が多く見られる。このような「「貧福論」論」は、重友毅氏によって、「彼等の理解の浅さを、同時に研究態度の不徹底さをみずから表白するものといわなければならない」と一蹴された[31]。しかし、同じ論文の中で、重友氏自身も「貧福論」の欠点をいろいろ取り上げられている。私見では怪異小説という前提から本篇を見れば、怪異性に欠けていることは確かに欠点の一つに数えられよう。議論の内容も「白峯」ほど生彩がない。

とはいうものの、町人文化が中心となる近世を生きる文人作家であり町人でもある秋成が、初期の談義本から影響を受けたと見られ

[31] 重友毅「『雨月物語』の知識的性格」(『秋成の研究』、文理書院、1971 年 5 月、143 頁) 参照。

る主題設定で、黄金の精霊の口を借りて貧福を議論したり、史実を引合いに金銭と庶民の生活ないし国家の運勢とのかかわりあいを議論したりするのは、構想としてかなり面白いのではなかろうか。貧福に必ずしも因果律が存在しないという社会現象を説明する部分に矛盾が見られることは事実であるが、古今東西、貧福の差の原点を誰でも納得できるように論断した人は一人も居まい。とにかく、『五雑俎』、『史記』などのような知識的な典籍のほかに、「三言」「二拍」『今古奇観』などの白話小説も含めて数多くの典籍から資料を取り入れ、引用例証を自由自在に駆使し、知識性に充ち満ちた話にまとめ上げたことは、秋成の思想、鋭敏な観察力、高度な構成技巧を十分に物語っている。

徳川時代の人間である秋成は、作品の中の時代をその前の戦国時代に置き換えることによって、自分の生きる徳川時代を未来の形式で予言し、当時の人たちの共通の理解を得て論理の妥当性を裏付けようとする趣向もきわめて興味深いものと言わなければならない。議論の内容に矛盾が見られ、徹底しないまま終わってしまった感じもしないではない。権力者に媚びるようなくだりがあるのも気になる。それにしても、岡左内の問いと黄金の精霊の語りという形を通じて、秋成が読本作家本来のペダンチズムで自分の知的披露をしながら、彼自身が抱いている世間の金銭の配分に対する疑問を投げかけた手法の巧妙さには感心せずにはいられない。

「貧福論」の論旨そのものの当否と物語としての出来映えのいかんを問わず、倹約を講じる秋成の金銭哲学あるいは金銭を正しく認識しようとする態度の一端を、「貧福論」を通じて知ることができる。そういう意味で、「貧福論」は平凡と言えば平凡、非凡といえば非凡、『雨月物語』のなかでは異色ある作品であり、秋成その人の思想及びその作品の本質を見極めるためにもあるべき一篇である。「貧福論」の文学的価値はまさにこの点にあると言いたい。

参考文献

浅野三平（1979）『雨月物語・癇癖談』新潮社

浅野三平（1985）「「貧福論」の考察」『上田秋成の研究』桜楓社

市古夏生（1998）「『伽婢子』における状況設定」『近世初期文学と出版文化』若草書房

井上泰至（1999）「「貧福論」の諷刺」『雨月物語論―源泉と主題』笠間書院

鵜月洋（1969）『雨月物語評釈』角川書店

大曽根章介ほか編（1983）『研究資料日本古典文学四　近世小説』明治書院

勝倉寿一（1994）『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』風間書房

近世文学史研究の会　編『雨月物語参考資料』文化書房

後藤丹治（1972）「雨月物語と本朝神社考との関係」『秋成』有精堂

後藤丹治（1958）「雨月物語原拠私考」『学大国文』創刊号

後藤丹治（1963）「雨月物語の成立と剪燈新話」『国語国文 22〔7〕』

駒田信二、千田九一訳（1965）『今古奇観（2）』平凡社東洋文庫 45

近衛典子（2003）『秋成研究資料集成 第 12 巻』クレス出版社

佐伯梅友（1966）『西鶴、秋成』（19 版）三省堂

重友毅（1970）『雨月物語評釈』明治書院

重友毅（1971）『秋成の研究』文理書院

諏訪春雄（1997）「江戸文学とはなにか」『江戸文学の方法』勉誠社

高田衛（2001）『江戸文学の虚構と形象』森話社

高田衛（1972）「幻語の構造　雨と月への私注」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社

高田衛（1980）『雨月物語評解』有精堂

暉峻康隆（1976）「文人文学の成立」暉峻康隆・郡司正勝編『江戸市民文学の開花 5』至文堂

長島弘明（1987）「作者.絵師.書肆.読者」『日本文学講座 5 物語小説－Ⅱ』大修館

中野三敏（1972）「寓言論の展開―特に秋成の論とその背景」日本文

学研究資料叢書『秋成』有精堂
中村博保（1999）『上田秋成の研究』ぺりかん社
中村幸彦編（1968）『上田秋成集』（日本古典文学大系 56）岩波書店
中村幸彦ほか編（1995）『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（日本古典文学全集 78）小学館
中村幸彦（1963）「秋成に描かれた人々」『国語国文 32〔1〕、〔6〕』
野田寿雄（1969）「怪異小説の系譜と秋成」『講座日本文学８近世編Ⅱ』三省堂
坂東健雄（1999）『上田秋成『雨月物語』論』和泉書院